

オスカー・ホフマン『第四の次元—形而上学的空想小説 *Die vierte Dimension. Metaphysischer Phantasieroman*』(1909) における時間の語り方

徳永菜摘野

0.

ドイツの通俗科学作家オスカー・ホフマン (Oskar Hoffmann 1866-1928) の著作には手引書や入門書、幅広い分野の実用書などの他に、今日ではサイエンス・フィクション (SF) と呼ばれる、自然科学的、空想的冒険小説があり、それらは当時しばしばジュール・ヴェルヌの文学作品に比された¹。確実にホフマンの作とされる SF のうち、単行本ないし小冊子として刊行された長・中編小説が 8 作品、青少年向け、大衆向けの娯楽・教養年鑑に発表された短編小説が 3 作品ある。ホフマンの SF にはドイツ愛国主義はそれほど強く打ち出されておらず、作中人物が悲劇的な最期を遂げることが多い傾向がある。

ローラント・インナーホーファーは 1870 年から 1914 年までのドイツ SF の特徴の一部として「闘争的な構造」と、「技術的な優越と国家主義的な権力の要求」を指摘する。つまり彼によれば SF に「時代の国家主義的な権力空想がもっともあからさまに表現された」のであり、「技術はゆえに競争の抜きんできた対象、決定的な闘争の手段」として日々進歩する²。ゆえにネッスン・サプラは「ホフマンは彼のたいていの同業者の国家主義的な傾向から遠い」³と評価する。科学技術の進歩の陶酔から一歩引いた、かといって悲観主義に落ち込んではいない冷静さと保守主義が、ホフマンの SF の持ち味である。

ホフマンの SF 小説『第四の次元—形而上学的空想小説』(以下『次元』)に関する先行研究では次の三つが論点となっている。①作中人物描写。ヘニング・フランケによれば『次元』を含むホフマンの SF の作中人物は、しばしば科学技術の進歩の犠牲者として描写されている⁴。②主題性。マンフレート・ナーグルやインナーホーファーは『次元』のテーマ的特徴として、神秘学、神秘主義、

心霊術を挙げる⁵。③科学技術史的背景。インナーホーファーは『次元』中のラジウムと後述する実験装置の背景に、光学機械やコミュニケーション技術があるとする⁶。

本稿はこれまでホフマンの研究で注目されてこなかった物語世界内の出来事の時間的順序とそれらの出来事が語られる際の順序との関係を明らかにする。この両者の関係を理論化したジェラルド・ジュネットの物語論、とりわけ「順序」を参照することがその方法として有効であるだろう。

1.

本作の梗概は次の通りである。コペンハーゲン大学の数学教授アルト・ルントは、催眠下で肉体から離脱した精神が異次元に移動する装置テレパトアを開発し、これを用いて四次元存在を証明する実験を複数回行う。実験中ルントの意識は多次元世界を放浪する。ゼロ、一、二次元世界は進化論と幾何学、そしてキリスト教的な世界創造論の奇妙な混交による生物の過去であり、これら低次元でルントは生命の始まりと進化の初期段階を観察する。一方、四次元に見られるのはキリスト教の不死信仰と神秘主義的な多世界観、そして天文学の風変わりな混合である⁷。というのも、四次元は宇宙空間であると同時に来世であるからだ。四次元でルントは死者の霊魂と出会い、彼らとの対話を通して人間の過去、現在、未来に関する認識を新たにする。

実験後ルントは四次元を含む異次元での体験を他の作中人物たちに語り、四次元の存在を主張するが、ほとんど受け入れられない。実験は打ち切られ、四次元存在が未解明なまま主人公は他界する。

2.

ジュネットの「順序」の諸概念の定義は以下のように要約される⁸。物語内容の順序と物語言説のそれとのさまざまな形式の不整合は、錯時法と呼ばれる。ここで言う物語内容とは意味されるものを、物語言説とは意味するものを、順序とは出来事もしくは時間的切片が物語言説において占める布置の順序と、同じ出来事もしくは時間的切片が物語内容において継起する順序を指す。物語内容の現時点に対して先行する出来事をあとになってから喚起する一切の語り⁹の操作は、錯時法の第一の形式である後説法である。そしてあとから生じる出来事をあらかじめ語るか喚起する一切の語りの操作は、錯時法の第二の形式である先説法である。先説法に重なった後説法、あるいは後説法に重なった先説法は複合的錯時法と呼ばれる。加えて後説法と先説法と並ぶ錯時法の第三の形式に、一切の時間的関係を剥ぎとられた錯時法、すなわち空時法がある。あらゆる錯時法に関し、それが挿入されている物語言説を第一次物語言説、挿入部の物語言説を第二次物語言説と言う。

さらに錯時法が現れる物語内容と第一次物語言説との間の時間的距離を射程と言う。射程と並ぶ錯時法の他の徴表に振幅がある。これは挿入部における物語内容の持続のことである。また後説法と先説法は以下のような下位概念に分類される。

◆分類

- (1) 外的/内的後説法/先説法
- (2) 等質/異質物語世界的後説法/先説法
- (3) (内的・等質物語的) 補完的後説法/先説法
- (4) (内的・等質物語的) 反復的後説法/先説法
- (5) 部分的後説法/先説法
- (6) 充足的後説法/先説法

◆分類の内容

- (1) 射程点が第一次物語言説の時間域の外部にあるか内部にあるか
- (2) 第一次物語言説の語る物語内容(複数であってもかまわない)とは異なった物語内容なのか
- (3) 物語言説の過去あるいは未来の部分における欠落をあとになってからあるいはあらかじめ

め充たすか

- (4) すでにあるいはやがて現れる物語切片を、同じくあとになってあるいは前もって繰り返すか
- (5) 第一次物語言説に追い付くことなく省略の形で終わる回顧あるいは予示か
- (6) 物語内容の二つの切片の間に断絶を生むことなく第一次物語言説に接合してゆくか

また混合的後説法と混合的先説法では、外的・内的後説法同士または外的・内的先説法同士が混合する。

3.

ジュネットの術語を用いて、『次元』の語りの形式の特徴や傾向を掴んでおこう。ジュネットの物語論では物語言説が中断されて錯時法が現れる個所と、錯時法が閉ざされて、物語言説へ戻る個所について、それらが明示されている場合とされていない場合が考察される。この点に関し本作に限っては、常に前者である。第一次物語言説と錯時法の交代の際、標識となるのは語り手の明示的なものの言い方であるが、本作ではそれ以上に物語内容そのものである。なぜなら本作では時間旅行、つまり作中人物の時間の移動が物語内容の主要な要素となっているからだ。作中人物の時間の移動を物語言説との切れ目の標識として用い、錯時法で表された物語内容を本稿では〈時間旅行の物語〉と呼ぶ。

『次元』の〈時間旅行の物語〉の射程点は、未来方向に対しては数年から数十年、過去方向へは生命誕生の時点である。『次元』の〈時間旅行の物語〉では作中人物が時間軸上の異なる二点間を往復する。そのため振幅は出発地と目的地の二つの地点の時間によって決定される。つまり作中人物が異なる時間点に出発して帰って来るまでに出発地で経過した時間は第一の振幅である。これに対し作中人物が目的地で過ごす時間は第二の振幅である。〈時間旅行の物語〉において第一の振幅と第二の振幅は一致しないことがあるにせよ、いずれの振幅も射程に比べ短い。射程と振幅の時間の長さの差は、死すべき人間である作中人物がそ

の寿命をはるかに超えた射程にある別の時間世界を、その寿命を越えない程度の振幅のうちに経験することを可能にしている。

『次元』の振幅に関してここでは一回目の実験を考えてみよう。一回目の実験で第一の振幅は三次元世界での実験開始から終了（正確には予期せぬ中断）までの二日である（vgl. 191）。第二の振幅は不明である。というのもそもそも時間の経過がないとされるゼロ次元世界や（vgl. 153）、「人間の場所の感覚はここでは決して働くことができなかったのと同様、空間と時間の概念もところを得ていなかった」（197）とされる四次元で、時間を計ることなど不可能だからだ。いずれにせよ各次元で流れる時間の早さが異なるため、第一の振幅と第二の振幅は一致しない。

次に、『次元』の〈時間旅行の物語〉をジュネットの後説法と先説法を用いて説明したい。しかし本作の語りの形式をジュネットのこれらの錯時法の形式に単純に当てはめることはできない。なぜならジュネットは彼の物語論の中で、以下に述べる二つの本質的に異なる物語内容が別々の錯時法の形式であり続ける場合について、考察しなかったからである。そしてこの場合こそ、本作に特徴的な語りの構造なのだ。

SF 作品（ここでは〈時間旅行の物語〉の有無は問わない）に典型的な語りの構造として、大きく分けて次の二つの物語内容が並行して語られる。第一の物語内容は個人や特定の集団の物語であり、これについてはジュネットの物語論においても西洋文学の諸作品を例に分析されている。第二の物語内容は人類や生物、科学技術や観念、思想、文化などの変容を問題とする。この第二の物語内容は個人や特定の集団を超越した〈物語・歴史 Geschichte〉であって、個人や特定の集団はそれらの変容に寄与する瞬間からのみ語られる。逆に、第一の物語内容の中で、超個人（特定集団）的な〈物語・歴史〉は、個人や特定の集団の体験と関連する限りにおいて触れられる。第一の物語内容が問題とする個人の性格描写や私生活は、第二の物語内容において、ほとんどあるいはまったく問題にならない。けれども SF において第一の物語

内容と第二の物語内容はたいてい分かちがたく結びついている。というのも SF ではほとんど常に、個人や特定の集団の体験を通して、超個人（特定集団）的な〈物語・歴史〉が語られるからである¹⁰。

『次元』の〈時間旅行の物語〉も上述の二つの物語内容を含む。〈時間旅行の物語〉において第一の物語内容の物語言説は、基本的に内的後説法である。なぜなら自明なことだが、異次元での体験は、それを語るルントにとり、回顧されるものだからだ。第二の物語内容の物語言説は後説法と先説法のどちらでもありうる。なぜならルントが低次元（過去）へ移動する場合、物語言説は後説法であり、ルントが四次元（未来）へ移動する場合、物語言説は先説法であるからだ。ルントが低次元（過去）へ移動する場合に見られるのは内的後説法（ルントの体験）と外的後説法（生命進化における過去）との混合である。

本稿が注目するのはとりわけルントが四次元（未来）へ移動する場合である。この場合、回顧的な語りの形式による第一の物語内容と、予告的な語りの形式による第二の物語内容とが〈時間旅行の物語〉の中でぴったり重なり合う。しかしそれはジュネットの言う複合的錯時法とは一致しない。なぜならジュネットの複合的錯時法の例では、重なっている後説法と先説法の開始部と閉止部が必ずしも一致していないうえ、後説法と先説法のそれぞれの物語内容は、たとえジュネットがこの二つの形式を用いて複数の物語内容が語られると考えているとしても、本稿での物語内容の二分類からすれば、第一の物語内容のみである¹¹。それに対し、『次元』では〈時間旅行の物語〉の重なっている後説法と先説法の開始部と閉止部は一致するうえ、後説法と先説法を用いて語られたそれぞれの物語内容は、本稿での物語内容の二分類からすれば、第一と第二の物語内容である。それはまたジュネットの言う空時法とも異なる。なぜなら〈時間旅行の物語〉において第一、第二の物語内容はそれぞれの内容から第一次物語言説との時間的關係を推理できるからだ。

〈時間旅行の物語〉の物語言説が第一と第二の

物語内容から後説法であるとも先説法であるとも解釈できるとき、この語りの形式は〈両説法 biplese〉とでも呼びうるものとなる。つまり〈両説法〉では〈時間旅行の物語〉に含まれる第一と第二の、両方の物語内容を先説法と後説法の両方で表す。〈両説法〉において物語内容は、現在において語っているルントから見て彼の過去であると同時に超個人的な未来でもある。

4.

『次元』で〈両説法〉が現れる個所を見てみよう。一回目の実験を終えたルントは彼の体験を三次元空間において次のように語る。なおジュネットに倣い、引用中の諸切片に括弧付きのアルファベットをふる。//は原文中の改行を示す。

(A) 「わしは目的を達したぞ」 (B) とルントは小声で言い、彼の記憶の中をひっかき回した。/ 「どんな目的をだい、ルント？」とホルム [ルントの同僚] が訊ねた。/ 「どんなだつて？— (C) わしは第四の次元を発見した。別の領域で、故人たちの靈魂を見て、彼らと話した。」 / (D) 周囲の者たちは視線を交わし合い、それらは老人 [ルント] の悟性がいくらか疑われていることを漏らしていた。/ 「パパ、すっかり目覚めているの、それともまだ夢を見ているの？」とイングリット [ルントの女の里子] が新たな不安に襲われて訊ねた。/ 「子供たちよ、そんなくだらんことを訊くでない。— わしはお前たちと同じように元気で、目が覚めておる。— (E) 驚くべきものをわしは精神的に見た。ゲーテ、シェイクスピア、ダーウィン、カール大帝— わしは彼ら皆を見て、彼らと話した。」 (192)

ここでは三つの時間的位置に基づいて配分された五つの切片を標定することができる。これら三つの時間的位置を、2 (ルントが物語っている現在)、1 (2 との関係から過去)、3 (2 との関係から未来) とすると、各切片の時間的位置は第一、第二の物語内容から次のようになる。

まず、第一の物語内容からすれば、切片 A は実

験中のルントの体験であるから、位置の 1 に配分される。切片 B で、ルントが回顧し、ホルムがルントの実験の目的を問い、ルントがホルムのその問いを繰り返していることから、その物語言説は作中人物たちの現在の思考を語っている。ゆえに切片 B は位置の 2 に配分される。切片 C は再びルントの体験であるから、位置の 1 に配分される。切片 D はホルムの問いに対するルントの回答、すなわち四次元を発見するという実験の目的が達成されたとするルントの報告を聞いた周囲の反応と、イングリットの現在のルントの状態に関する問いかけ、そしてルントの現在の自身の状態に関する応答であることから、位置の 2 に配分される。切片 E は再びルントの体験であるから、位置の 1 に配分される。したがって、第一の物語内容からテキストの時間的位置関係を公式化すると、以下のようになる。

A1 B2 C1 D2 E1

この公式により第一の物語内容からすればテキストが過去と現在を行ったり来たりしていることが明白になる。

次に第二の物語内容から各切片の時間的位置を考えてみたい。といっても切片 B、D は第一の物語内容としてしか解釈することができないから、ここでは考察の対象から外す。残る切片 A、C、E は、ルントを含む第三の次元の全人間が将来体験するであろう出来事を予告しているとも解釈することができる。したがって、第二の物語内容から三つの切片の時間的位置関係を公式化すると、以下のようになる。

A3 C3 E3

第一と第二の物語内容は同じテキストに対する二つの解釈である。そこで第一と第二の物語内容からある切片の時間位置が異なることを示すセミコロンの用いて、上の二つの公式を統合すると

A1;3 B2 C1;3 D2 E1;3

となる。この公式により第一と第二の物語内容からすればテキストが過去・未来と現在を往復することが見て取れる。

要するに切片 A、C、E はレントの体験談であるとともに、人間に普遍的な未来（死後）の生の予告でもある。これらの切片の物語言説は、内的後説法（レントの四次元での体験の回顧）にも、反復的先説法（レントの死を一例とする、人類の死後の生に関する予告）にも解釈されうる。切片 A、C、E のように、個人的な物語内容と超個人的な物語内容とが、（多くの場合、開始部と閉止部が一致する）後説法と先説法を用いて語られる場合、その形式を本稿では〈両説法〉と呼ぶのである。

切片 A、C、E が反復的先説法であることは、語り手が最終（第 16）章でレントの死について言及する個所から確認される。

レントが永遠に目を閉じ、霧の靈魂たち〔四次元住人たち〕の領域へ移り住んだあと、人々は短い間彼のことをふたたび思い出した。（239）

切片 A、C、E に見るように、レントは生前に実験で四次元住人たちの領域を訪れていた。レントが精神病院に搬送されてから死までの、彼の私生活や死因などは語られないのに対し、レントの三次元から四次元への移動が再度語られる。このことからレントが語ったことが彼自身の、そして人間に普遍の未来に関する予告であったことが分かるのである。

『次元』の時間の小構造だけでなく、大構造にも、〈両説法〉を指摘することができる。レントの精神が四次元空間に行き、そこの住人である死者たちと交流する、第 6、7、8、9、10、11 章は、今から 10 年前に行われたレントの実験として（vgl. 129）、語り手により回顧的に語られる。これらの章は人間の死後の生をも予告する。

まとめると〈両説法〉は、〈未知の未来を既知の未来に転換する規則〉に則った文学的な語りを用いる手段の一つであり、回顧しつつ予告すると

いう『次元』に特有の物語言説の性質を表すのである。

テキスト

Hoffmann, Oskar: *Bezwinger der Natur. Phantasieroman: Die vierte Dimension. Metaphysischer Phantasieroman*. Lüneburg 2007. 同書から引用・参照する際は括弧付で頁数のみ示し、引用個所の日本語訳はすべて筆者による。

【注】

- 1 ホフマンの生涯と著作の詳細は拙稿参照。Opfer der Wissenschaft oder »mad scientist«? Satirische Anspielungen auf Gustav Theodor Fechner und Johann Karl Friedrich Zöllner in Oskar Hoffmanns »metaphysischem Phantasieroman« *Die vierte Dimension* (1909). In: *Quarber Merkur* 122. Gießen 2022, S. 156-219, bes. S. 156-159.
- 2 Innerhofer, Roland: *Deutsche Science Fiction 1870-1914*. Wien u.a. 1996, S. 457-458.
- 3 Saprà, Nessun: Hoffmann, Oskar. In: *Lexikon der deutschen Science Fiction und Fantasy, 1870-1918*. Bd. 1. Oberhaid 2005, S. 130-133, hier S. 130.
- 4 Vgl. Franke, Henning: Hoffmann, Oskar. In: Christoph F. Lorenz (Hg.): *Lexikon der deutschsprachigen Science Fiction-Literatur seit 1900*. Frankfurt a.M. 2017, S. 343-352, hier S. 347.
- 5 Vgl. Nagl, Manfred: *Science Fiction in Deutschland*. Tübingen 1972, S. 130, FN 297; Innerhofer, S. 407.
- 6 Vgl. Innerhofer, S. 407.
- 7 『次元』における科学技術と心靈主義との関係については拙稿（前掲書）を参照。
- 8 ジュネット、ジェラール『物語のディスコース』風の薔薇、1985年、15-92頁参照。
- 9 ジュネットにおいて「語り」は「語る行為」ないしその行為が置かれている状況と同義である。同、17頁参照。
- 10 この筆者の見方と類似する見解として、インナーホーファーは 1870-1914 年のドイツ SF の中で、地球と火星の両文明の接触をテーマとする諸作品に、生物学から文化史に転用された、低次の存在から高次の存在への単一線的で、必然的な発展を指摘し、両惑星に「人類の現在と未来が[...]同時に表現されることができた」としている。Innerhofer, S. 26, vgl. auch ebd., S. 259-262, 284-289. ハンス・エッセルボルンも SF において「仮説的な諸前提のもとで社会的、人類的な発展の諸可能性が重要である」と述べる。Esselborn, Hans: *Die Erfindung der Zukunft in der Literatur*. Würzburg 2020, S. 28.
- 11 ジュネット、36頁参照。